慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アフロ系ボリビア人による伝承曲"サヤ"の再評価とコミュニティの変容 : 2006年度南ユンガス地方チカロマ村での調査から
Sub Title	
Author	梅崎, かほり(Umezaki, Kaori)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2007
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.64 (2007.) ,p.151- 154
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成18年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069957X-00000064-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れるfMRIを用いて追加実験を行うことが望まれる。

参考文献

1) McCarthy G., Luby M., Gore J., and Goldman-Rakic P. (1997) Infrequent Events Transiently Activate Human Prefrontal and Parietal Cortex as Measured by Functional MRI. *Journal of Neurophysiology*, **77**(3): 1630-1634.
2) Kirino E, Belger A, Goldman-Rakic P, McCarthy G. (2000) Prefrontal activation evoked by infrequent target and novel stimuli in a visual target detection task: an event-related functional magnetic resonance imaging study. *Journal of Neuroscience*. **20**(17): 6612-6618.
3) Zeki S., and Marini L. (1998) Three cortical stages of colour processing in the human brain. *Brain*. **121**(9): 1669-1685.
4) Kanwisher, N., Tong, F., Nakayama, K. (1998) The effect of face inversion on the human fusiform face area. *Cognition*, **68**(1): B1-B11.

アフロ系ボリビア人による伝承曲“サヤ”の再評価とコミュニティの変容

——2006年度南ユンガス地方チカロマ村での調査から——

梅　崎　かほり

1. 目的と概要

報告者は修士課程より，ボリビアのアフロ系住民によるアイデンティティ獲得運動およびその運動の展開において鍵となった伝承曲“サヤ”について研究を続けてきたが，その過程では，アフロ系コミュニティの近現代史研究が非常に少ないことが実感された。これは，アンデス文化＝先住民文化という固定化された見方によるものと考えられるが，このような状況の下，ボリビア社会では，アフロ文化認識がごく一面的で偏ったものとして定着していることも明らかになってきた。これは都市部で盛り上がった運動の背景を理解し，運動に“サヤ”が使われたことの意味を分析，考察する上でも克服されるべき点である。そのためには，アフロ系住民の伝統的集住地区における“サヤ”と，住民の意識の変遷をたどる必要があると考え，2003年度からフィールドを村落部も広げつつ調査を進めている。

2006年度の調査期間は約3ヵ月で，ボリビア共和国ラパス県におけるアフロ系住民の伝統的集住地区，南ユンガス地方チカロマ村周辺を調査地とし，

①祭事（6月中旬のチカロマ祭及び8月上旬のイルパナ祭）および8月6日独立記念日の式典の観察，記録

②各祭事で歌われる“サヤ”の歌詞及び音源・映像の収集

③住民（特に高齢者）への聞き取り調査及び参与観察

を集中的に行った。

2. 祭と日常の語りから

6月に行われたチカロマ村の守護神祭“グラン・ポデール”では，村の役職者や“サヤ”グループのリーダーに了解を得た上，祭りの一部始終をビデオ及び写真に収めることができた。8月に隣村のイルパナ村で行われた“ラス・ニエベス”聖母祭でも同様にチカロマからの参加グループを撮影したが，こちらの祭りは幾分観光化されているのに対し，グラン・ポデール祭は外部との接触が比較的少なく，映像としての記録は村にも残っていないため，大変貴重な資料となった。この二つの祭りでは，同じ“サヤ”グループでも参加人数や意気込みに違いがみられたが，それは祭りの規模や地域における知名度が大きく異なること，自分たちの村で演奏することと，隣村イルパナで客演することによる意識の差異などが作用したものと考えられる。また，当日および後日に行ったグラン・ポデール祭についての聞き取り調査では，この祭りが発祥したころの村の様子や，“サヤ”の衣装，祭りの進行の変化などについて語りを得ることができた。その際，一部の人々は“サヤ”が「昔から」「毎年」行われ続けたように語るのに対し，「“サヤ”は外の祭りへは常に参加していたものの，村のグラン・ポデール祭では一時期姿を消した」，「今年初めて祭りに来たお前が，“サヤ”を見られたのは幸運だった」など，“サヤ”グループの祭りへの参加が断続的であったことを語る人もおり，この両者の食い違いに見え隠れする意図や立場は今後丁寧に追っていくべき課題として浮上した。

日常生活については，村のアフロ系住民の大部分が生業とするコカ農業の，収穫から出荷までの作業に参加しつつ，その様子を記録した。これは必ずしも作業そのものの記録を目的としたわけではなく，とくに親族や友人との共同作業で行われる「収穫」が，村人同士のコミュニケーションの場であり，情報交換の場であることから，この「場」に立ちあうために行ったものである。また，村における食糧供給の一手段である川猟や狩りへ同行するなど，極力村の日常生活をともにすることで，村の集会の見学や，村役会議の手伝いを任される機会を得ることができた。さらに，村の年長者や役職者を含む8名が長時間のインタビューに応じてくれ，世代，職業，ジェンダー，土地との関係性などにおいて実に多様な口述史・資料を得られた。なかでも，村の最年長の一人であるモデスト・サバラからは，農地改革(1953)以前に存在していたアシエンダ（大規模農園）時代の話を聞くことができた。当時の村祭りの進行や徴兵経験のほか，アシエンダでの小作農生活や当時の村の様子などについて語られた話は，後にインタビューが実現したエダ・アルカサルの話と照らし合わせると非常に興味深い資料となった。モデストとエダは同年代で，同じ時代のチカロマを知る二人であるが，アフロ系の血を色濃く受け継ぐモデストに対し，エダはスペイン系の家系で，アシエンダ時代には農場主であった一族の子孫である。アフロ系の農民たちとは，何代も生活習慣を異にしていたであろうエダとその妹ヨランダは，地主という立場から見た村の変化を古い写真とともに見せてくれたほか，アフロ系の人々から今はほとんど消えてしまったという独特の訛りや言葉遣いの存在についても語ってくれた。また，現在チカロマに建つアルカサル家の倉庫には，大農園時代の馬具や農具などが残っていた。これらの内容の詳細は，チカロマ村の若い世代にも語り継がれることなく埋もれてきたものであることが，村の20代の青年たちの反応からも明らかになった。

3. サヤの歌詞収集から

今回の調査では，過去には記録し得なかった様々な歌詞の収集が実現した。これは多くの年長者に接触できたことに加え，現役のメンバーの中でも，幼いころの記憶が鮮明であったり，自分自身が作曲も

手がけ，歌うことが日常化している若者の協力があったためである。祭りで耳にした歌詞を覚えて後日確認する作業，よく歌う歌詞を口ずさんでもらい書き取る作業から歌詞を集め，また何種類もあるタンボル（太鼓）のリズム一つずつを資料として録画することにも協力を得た。この際に，我こそが継承者であると自認する人物，村の“サヤ”を取り仕切っていると見られている一家の存在が明らかになったが，この歴史的背景や彼らの位置づけについては更なる調査を要する。

“サヤ”の歌詞には，古くから現代まで歌い継がれているポピュラーなもの，各地域の高齢者のみが歌えるもの，現代の若い世代が新たに作詞しているものとがあり，今回はそれぞれをおおよその年代別に記録することができた。なかでも40年以上昔のものとして回想された歌など，聞き取り調査中に挙がったいくつかの歌詞には，これまでの資料や先行研究等にも記録がないものや，若干フレーズが異なるものなどが含まれ，貴重なデータとなった。

数少ない“サヤ”に関する先行研究のなかで，主にラパス市内および都市部により近い北ユンガス地方での調査をもとにした研究では，“サヤ”の歌詞には元来社会的・政治的メッセージ性の強いものが多いとされており，報告者自身もその考えのもとで研究を進めてきた。しかし，都市部から離れた今回の調査地，南ユンガス地方チカロマ村で古い“サヤ”として挙がってくるものには，ごく日常的な，生活に身近なものが多くみられた。歌詞収集の継続と慎重な検証を要するが，“サヤ”が「政治的」になったのは—もしくは政治的な歌詞が多く歌い継がれるようになったのは—運動側の意図で，ごく現代的な傾向だったのではないかと仮定できよう。非常に興味深い点として，今後力を入れて研究を続けたいところである。

4. オーラル・ヒストリーの方法論として

フィールドワークを重ねてオーラル・ヒストリーを記述するという作業は，近年歴史学の分野でも盛んになりつつある手法だが，その方法論として確立されたものはなく，文化人類学のフィールドワークと共通する非常に繊細な作業であると認識している。これまで，口述史・資料を取り扱うことの難しさ，意義，調査対象との関係性など多岐にわたる事項について，多様なフィールドに取り組む研究者と議論してきたが，報告者にとって今回の現地調査は方法論の面でも実践を兼ねた検証の場となった。

具体的には，上述した聞き取り作業において，オーラル史料収集の際の聞き手の違いによる話者の態度および口述の内容の変化に注目しつつ，次のようなことを行った。

①「よそ者（＝報告者）」がどのように村に入り，人と接触したか，話を聞こうという際に，何を考え，どのように語ってもらうことを目指したかをまとめた。

②実験的に2人の村の若者にインタビュアーを務めてもらい，彼らの行うインタビューに同席して話を聞いた。

ここで意図したのは，一点目に報告者自身がインタビュアーとして「よそ者」から「心安いよそ者」へ変化する過程の考察であり，二点目に「私」というインタビュアーに向き合う村人の語りが，どのような時間の経過とともにどのように変化するか，また同じ村で生まれ育ったインタビュアー相手には，村人は何をどのように語るのかという語り手の観察であった。しかしこの作業からはその他にも，村人がインタビューを受ける側として語るのではなくインタビュアー側に立つという作業によってうかがわれる歴史認識があったこと，報告者とはまったく異なる歴史的関心をもって語りが進められていったことが観察され，オーラル・ヒストリーを記述する際の着眼点としても参考になる結果が得られた。

参考文献

Angola Maconde, Juan, 2003 [1999], *Raíces de un pueblo: Cultura afroboliviana*, Producciones CIMA, La Paz.
Durán Vacaflor, Eva, 1996, *Ahora no es tiempo de la esclavitud: La saya*, UMSA (Tesis de grado: Literatura), La Paz.
Geertz, Clifford, 1973, *The interpretation of cultures: Selected essays*, Basic Books, New York. (＝1987, 吉田禎吾ほか訳, 『文化の解釈学 I』岩波書店.)
Rey, Mónica, 1998, *La saya como medio de comunicación y expresión cultural en la comunidad afroboliviana*, UMSA (Tesis de grado: Comunicación social), La Paz.
Sánchez C., Wálter (ed.), 1998, *Tambor mayor: Música y cantos de las comunidades negras de Bolivia*, Centro Pedagógico y Cultural Simón I. Patiño, La Paz.
川田順造, 2001 [1976], 『無文字社会の歴史』岩波書店.
清水透, 2006, 「フィールドワークと歴史学」『歴史学研究』No. 811.

「国民道徳論」の形成に及ぼした儒学の影響に関する研究
——井上哲次郎の儒学観と教育思想をめぐって——

江 島 顕 一

本研究の概要

本研究の目的は,「国民道徳論」の形成に及ぼした儒学の影響を究明することである。この課題にこたえるため, 平成 18 年度は,「国民道徳論」の中心的な唱道者のひとりであり, 明治の哲学会, 教育界に厳然たる勢力を持って君臨した人物である井上哲次郎に着目し, 彼の儒学観及び教育思想（とりわけ徳育観）を分析する研究に取り組んだ。

はじめに

近代日本思想史上において,「国民道徳論」なるものが直接的に論じられるようになったのは明治末年であったといわれるが, その提唱者であった井上については, わが国にドイツ観念論哲学を移植することに尽力した「日本型観念論哲学の確立者」として, また所謂「教育と宗教の衝突」論争における「教育勅語」の「公定解説者」として等, その思想は様々な視座から論じられてきた。こうした多岐に渡る活動の中で, 井上が儒学を対象とした研究・言論活動に関しては, これまで主に明治三十年代に刊行された儒学三部作に研究関心は向けられ, その内容分析や日本儒学における位置づけ等を中心とした論及がなされてきたが, 井上の儒学理解・認識については, 必ずしも明らかになっているわけではない。

本稿では, 井上が儒学に対し, そこに見出される有用性について,「国民道徳」を養成する徳育との関連で語った論考の分析を行い明らかとなった井上の儒学観の要約を示すこととする。